

農産業への影響

記録的な降水量不足を観測した西オーストラリア州で、一番被害を受けたのは農産業であったといえます。ここでは、西オーストラリア州で栽培が盛んな小麦を始めとした穀物生産にどれほどの被害があったのかを紹介します。

土中水分量

右図は昨年6月末の、作物が吸収できる土中の水分量を表している。パースや州南西部では、通常5月から降水量は急激に増えるが、昨年5月は平均の1/4しか降水量がなかったうえ、6月に入ってから例年の同じ月と比べ約14%の雨量しかなく、州南西部の穀物生産地帯（Wheatbelt）にある北部のジェラルトン（Geraldton）付近で栽培されていた作物にとっては、5mm以下の水分しか吸収できないという状態であった。南部のエスペランス（Esperance）付近や中央内陸部では、60mm以上の土中水分があったものの、その他の海に近い地方では極めて少ない水分量が観測された。

穀物の収穫量

西オーストラリア州の穀物集荷販売団体（CBH：Co-operative Bulk Handling Ltd.）は、州南西部の穀物生産地帯での今期の収穫が全て終わり、集荷をした穀物は全体で630万トンであったと報告した。その内の70%は小麦、20%が大麦、その他がカノーラやエンドウ豆、カラスムギなどであった。CBH各地の集荷場の報告と右図を照らし合わせると、作物が吸い上げられる水分が少なかったジェラルトンでは過去最低の穀物の生産量を記録し、降水量に恵まれた前年より83.5%の減少となったことから、雨季の降水不足が生産量と密接に関係していることが分かる。一方、エスペランスでは約140万トンの収穫があり、昨年後期の雨量不足を考えると比較的多い結果であった。その他の主な地域ではクイナナ（Kwinana）で、予想より少ない約320万トンを集荷、前年と比べ半分以下の減少となり、アルバニー（Albany）では前年の約220万トンより約80万トン少ない約140万トンの収穫であった。

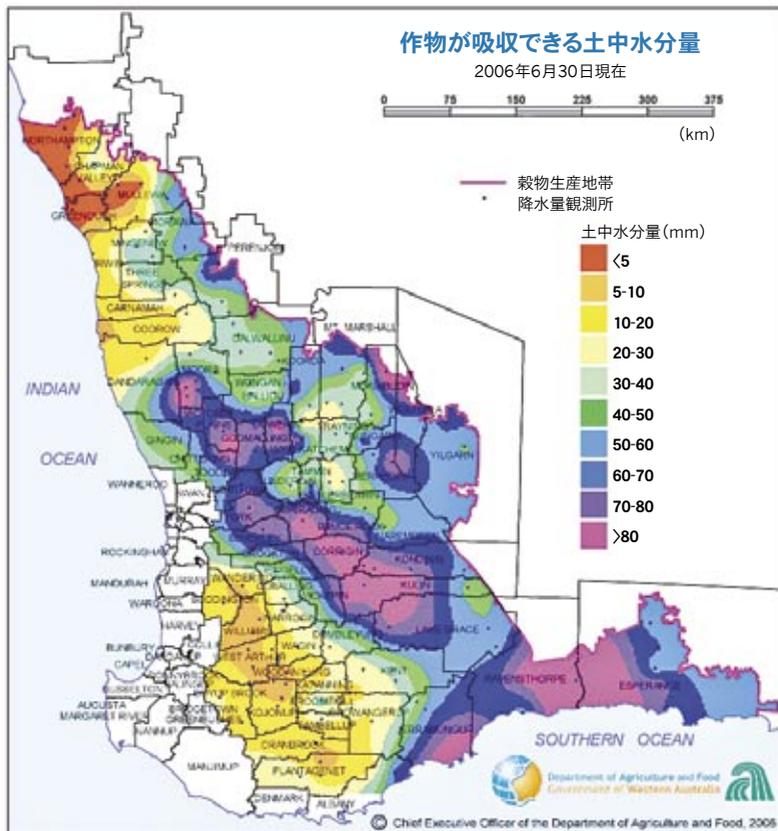
Information courtesy of CBH Harvest Report #6

小麦輸出機関の変移

昨年は少雨の影響で小麦の生産量が落ちたため、西オーストラリア州の小麦農家が高値での出荷を望んだ。しかし、オーストラリアの小麦輸出の専売権を所持していたオーストラリア

日本に与えた影響

日本は西オーストラリア州で作られるオーストラリアン・スタンダード・ホワイト（ASW/うどんの原料となる）と呼ばれる小麦を始めとした穀物を大量に輸入しているが、昨年の降水量不足による生産量減少で、日本各地ですでに小麦などの値段が高騰している。しかし、AWBは日本へ輸出する小麦の量は確保する方向で検討中



Information courtesy of the Department of Agriculture and Food

ア小麦庁（AWB：Australia Wheat Board）は昨年末、今シーズンの1トンあたりの小麦の値段を低く設定したため、多くの農家はAWBへの出荷を拒んでいた。そこで、昨年12月に豪連邦政府がCBHとウィート・オーストラリア（Wheat Australia）にも輸出版売権を与えたため、小麦農家は約60年ぶりに、より高い値段を提示した輸出版売会社を選ぶことができ、小麦の出荷ができるようになった。

このように、昨年の降水量不足は西オーストラリア州農産業の主要作物である穀物の生産量に大きな影響を与えた。今年の気象への農家の人々の期待は大きい。

とのこと。また、日本でオージービーフと呼ばれるオーストラリア産の牛肉の輸入価格は、水不足による牧草の育成不良と飼料価格の上昇が原因で、昨年6～12月で約30%上がった。この価格高騰は今年5月まで続くと見られている。